説教20220904申命記30：15-20ルカ14：25-33「命を選べ」

「見よ、わたしは今日、命と幸い、死と災いをあなたの前に置く。」主なる神は私たちに毎日この様に言われて、私たちに自由な選択を迫られています。命と幸いの道を選ぶのか、あるいは、死と災いの道を選ぶのか、この分かれ道は、今日という日のうちにも、何度も何度も、私の目の前に現れることでしょう。それはまるで迷路の様であります。標識も定かでない迷路です。

選ぶということは、人生において目標ともなり且つ、挫折のキッカケにもなるでしょう。よい仕事を選んで意気揚々とする人もいれば、悪い仕事を選んだと考えて、意気消沈する人もいることでしょう。

主なる神は、そんな選びを私たちの前において、毎日毎日、幾たびも選びをするよう言われています。今日は敬老感謝記念礼拝をお捧げしていますが、多くの様々な選びを経験して、今ここに居られるご高齢の信徒の方々一人一人を、主イエスが豊かに祝福してくださいます様に。

標識も定かでない分かれ道の前で、主なる神は私にこう言われます。「あなたは命を選び、あなたもあなたの子孫も命を得るようにし、あなたの神、主を愛し、御声を聞き、主につき従いなさい。」主なる神は、初めから主の御声に聞き従いなさい、そのようにして選びの道を歩みなさい、と私たちに言われている訳ですが、今では、御子イエスと共に歩む時代となって、私たちは、こうして主の十字架を見上げながら、主イエスと共に一歩一歩を歩んでいるのです。ですから私たちは常に、主イエスによって、命の方を選ぶことが出来ます。主イエスは「安心して行きなさい」と私たちに声を掛けられます。主イエスに全てを委ね主イエスと共に歩めば、多くの緊張を強いられる分かれ道も、何ら迷うことがない一本道のように見えてくることでしょう。

さて、今日のルカ福音書の箇所では、主イエスと共に歩むことを、主イエスの弟子である、と言っています。主イエスは、私の弟子である条件を、群衆たちに説いています。大勢の群衆が主イエスについてきていました。なぜ大勢であったか、それは、この時、群衆たちが安易にものを考えていたからです。すなわち、主イエスが近い将来に、エルサレムでまことの王として即位して、このユダヤの国を救ってくれるはずだ、という安易な期待です。しかし、主イエスの御心はそんなことではありませんでした。主イエスは、エルサレムにある、罪人がかけられるための十字架を目指して、今、前に進んで歩いているのです。ですから、大勢の群衆たちには、このとき主イエスがほんとうに考えていたことは、さっぱり理解不可能でありました。主イエスは、「自分の十字架を背負って」と群衆に言われましたが、群衆はなぜ、主イエスの口から十字架という言葉が出て来るのか、さっぱり分からなかったことでしょう。群衆が主イエスにふさわしいと思ったのは、十字架ではなくむしろ、28節に出て来ます、塔という言葉であったはずです。詩編には「わたしの力よ、あなたを見張って待ちます。まことに神はわたしの砦の塔。」という様に、主なる神を私の塔としてあがめる言葉に満ちています。

今日のルカ福音書の箇所は、十字架で語られる事柄と、塔で語られる事柄とが比較されている、一種のたとえ話であります。主イエスのたとえ話と言いますと、特にルカ福音書には多く記されていまして、皆さん、放蕩息子と父親のたとえなどをよくご存じかと思います。今日のたとえ話の前後もたとえ話であります。そんな中、今日の話がたとえ話として印象が薄くて、場合によってはたとえ話の内に数えないこともあるのはなぜでしょうか。その理由をつらつら考えていたのですが、或る程度分かりました。それは、今日の十字架の話も勿論ですが、塔の話、そして戦争の話も、全く作り話ではないということです。十字架の話も、塔の話も、戦争の話も、現代にまで継続している、リアルな話なのです。ですから、たとえ話のように聞こえないこともあるのです。ですが、主イエスは33節で「同じように」と言っておられますから、明らかに、十字架と塔とを比較して、たとえで話をされているのです。お分かりかと思いますが、この時の群衆に、真正面から、十字架の贖いの死とそれに続く復活を説明したとしても、分かってもらえる可能性は無きに等しかったので、主イエスは十字架と塔のたとえ話で、いわばほのめかすように語られたのでした。

さて、今こうして主イエスの十字架の下に集められている私たちには、十字架での主イエスの尊い死とそれに続く栄光ある復活が、現実であります。こちらこそ、私たちが日々選ぶべき命の道であります。

その一方で、28節から32節までに記されています塔の話と戦争の話も、又、今の私たちを取り巻いている現実であります。塔の話と戦争の話をイエス様はどのような思いを懐いて私たちに語られるのでしょうか。この様に腰を据えて原価計算して、塔を次々に完成させる人間たちをほめているのでしょうか。又、戦争にあって、巧みに敵国と和睦する人間たちの知恵に感激されているのでしょうか。

それはそうではありません。主なる神は人間のこういった能力や知恵の限界を語っておられます。パウロの言葉でいえば「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」のであります。

今の世界には多くの塔がそびえたっています。日本でいえば、東京スカイツリー、これは世界一の高さだそうですが、別府でいえば、別府タワーがあります。それぞれの塔には用途もあるようですが、何と言ってもそれはシンボルとして、人の眼を引き、大きな意味を持たされることでしょう。この様に人間が自力で造り、自力で意味を持たせようとする塔のことを、主なる神はあまりよくは思われないことでしょう。古くにはバベルの塔が主なる神によって終了した話がありました。

又、戦争にあって巧みに敵国と和睦することも、主なる神は良くは思われていません。そのような権謀術数を重ねても、戦争は終わりませんし、戦争の闇の深さはいや増してくる様であります。主なる神が、私たち人間が戦争の内にある場合にとるべき態度として、反撃でも和睦でもなく、第三の道を歩めと勧められました。それがイザヤ書30章１５節に記されています。「お前たちは、立ち帰って／静かにしているならば救われる。安らかに信頼していることにこそ力がある」

主イエスが言われる命の道は、あくまで十字架の道であり私たちが十字架へのイエスにつき従って行く道なのです。ですが、現代社会を見渡してみますと、そこには商業的なビルが立ち並び、戦争はより先鋭化し、情報戦になり、深まっています。これらは私たち人間が腰を据えて、知恵を尽くして、成し遂げた産物であります。人間は高いところに住むようになり、核爆弾による戦争はボタン一つで、人類を滅ぼすまでの力を持ってしまいました。主イエスは、今日の聖書箇所で、現代のこの有様をも言い当てておられるようであります。

将に「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」のであります。人の賢さ、人の強さの行く末を、現代は悲観的にではありますが見通すことが出来るようになりました。このまま、人の賢さ、人の強さだけで押し進んでしまったら、もう人類はヤバいだろうと誰もが、心の中で思い始めています。しかし、だからと言って、どうすればよい、こうすればよいという妙案は、人間の頭には浮かんでこない状況なのではないでしょうか。

そこで、私たちには、身につまして聞くべき今日の主イエスのたとえ話があるのです。それでは、人の賢さ、人の強さに勝る、神の愚かさ、神の弱さに聞いて参りたいと願います。

コリントの信徒への手紙一1章 23節から

わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。

主イエスの弟子である私たちにとって、キリストの十字架は神の力、神の知恵であります。しかし、弟子でない人にとっては、キリストの十字架は、つまづきであり愚かな者であります。現代にあって、人々はなぜ、あまり教会に来ようとしないのか、それは十字架がつまづき、愚かさに見えるからです。そこに価値を見出さないから来ないのです。その選びは、今日のたとえ話を読むと身につまされて分かることでしょう。現代社会で仕事をしていれば、クリスチャンであっても、黒字をもたらす仕事を求められますし、戦争になれば、核爆弾の脅威にさらされます。クリスチャンであっても、人の知恵を選ぶのか、それともそれに勝る神の愚かさを選ぶかの分かれ道に日々立たされるのです。

今の世の中で、会社や組織の中で、仕事をやり遂げようとすれば、それは並大抵のことではないでしょう。命がけで計画をして、計算をして、腰を据えて臨まなければ、決してその仕事をやり遂げることが出来ないでしょう。ですが、そんなあなたの前に、主イエスは、人間の知恵に勝る神の愚かさをもって、違う道を指し示して下さいます。それが、主イエスの弟子となるという道です。それはどんな道かと言いますと、「自分の十字架を背負ってついて来る」道であり、「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、時にはこれを憎」む道であり、「自分の持ち物を一切捨て」る道なのであります。

これらの道はいかにも一見愚かな道であります。しかし私たちは、十字架に向かう道すがら、この愚かさについてよく黙想してまいりたいと願います。

「父、母、妻、子供、兄弟、姉妹を、更に自分の命であろうとも、これを憎まないなら、私の弟子ではありえない」と原文には書いてあります。が、主イエスは、何が何でもこれらを憎めなどと言われている訳ではありません。将に、罪ある私たちが罪あることをしたときは、これを憎めと言われているだけなのです。また、主イエスは「自分の持ち物を一切捨てないならば、私の弟子ではありえない」とも言われましたが、これもよく黙想してみれば、当たり前のことです。なぜならば、私たちがこの世を去る時に、私たちが持ち物にしがみついていてもなんの益もありませんし、それらを捨てる、即ちそれらと別れることになるのは当たり前のことだからです。

召された者には、十字架は将に愚かさではなく神の力、神の知恵となります。十字架の上で私たちは、自分の罪や、この世のものに無駄に執着する思いを打ち砕かれ、十字架に隠された神の力にあやかって、復活の命によみがえることが出来ます。

私たちは、現代社会にあって、一見賢くスマートに見える、商業ビルや、情報の戦いの世界を選んでしまいますが、そうではなくて一見愚かに見えるけれども、まことの命の選択である、十字架の主イエスの弟子となる道を人々が選ぶことが出来るように、祈り願って参りましょう。それには、腰を据えて、神の計画に身を委ねて、神の御心を行っていくことが必要です。どうか私たちが毎日毎日を、命の方を選び、高齢の方も又子供たちも全員が、十字架の道を選んで歩んで行くことが出来ますようにと願います。

祈ります

天の父

主に従う人は地を継ぎ　いつまでも、そこに住み続ける。とあなたは言われます。どうか私たちが御子の十字架の道に最後まで歩んで、永遠の命を生きることが出来るようにしてください。一見華やかに見えるこの世の道が、滅びに至ることを悟り、一見愚かに見える十字架の道こそ、命と幸いに至ることを私たちに悟らせて下さい。

永遠の命に生きる私たちが、互いに聖霊の親しき交わりを味わうことが出来ますよう、私たちを一つの聖霊で満たして下さい。御言葉の中に命があり、御言葉を聞く者は何時までも希望の内に生き続けることが出来ます。どうか、高齢者の方々、そのご家族を御言葉によって、あなたの愛の内に引き寄せて下さい。

父と聖霊ともに一体